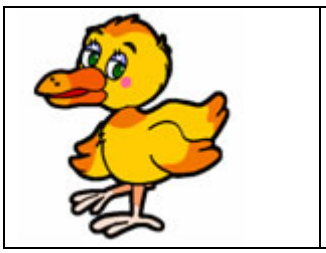


NTTOBSV 会会報 No. 18

2010 年 7 月 6 日（火）

Home page　　：http://sv.nttob.org/
e-mail　　：sv@info.nttob.org

目次

◆巻頭言　これからの途上国(中心国)に対する支援について_
当会顧問　　石井　孝氏

◆現地たより
青年海外協力隊　カンボジア活動報告　賀村　瑠璃子氏

◆青年海外協力隊派遣壮行会の開催
２２年度１次隊

◆本会入会者リレー寄稿 パラガイ派遣記
ＳＶＯＢ　下井田　秀雄氏

◆提案　海外派遣者の技術等支援体制について

巻頭言　途上国支援に対する提言

これからの途上国（中進国）に対する支援について

顧問　石井　孝

１．　はじめに

我々電気通信経験者が今後途上国支援で考えるべき側面について意見提起するので、大方のご批判、ご意見を賜りたい。

これまで電気通信関係における途上国に対する技術的開発支援は、全国的固定電話網の設計、建設、並びに保守と凡そ相場が決まって居たように感じる。

所が、昨今は携帯電話が世界的に普及し、今更固定電話網の全国的完備と云う声はあまり聞かれない。また、既に都市部などをカーバーして居る電話網からの料金収入も減収の一途を辿っているようで、固定電話網に一頃の人気はない。

それでは NGN かと云うと、まだそこまでは要らないという事である。

２．　途上国が必要とする IT の導入分野

タイおよびアルゼンチンでのボランテイア経験を通して個人的に感じた事は、行政サービ

スへのコンピュータ導入が一つの大きな国家的課題になって居ると云う点である。
世界各国とも行政サービスの高度化に対する国民の要望は高まる一方であるが、行政コストを抑えパフォーマンスを上げるためにはコンピュータ化がどうしても不可欠となる。
しかしながら、途上国にとってコンピュータ導入の段取りを策定し、具体的導入を図り、更に導入後のシステムの維持・管理となると、これは並大抵ではない。

３．　導入プロセスにおける課題

（１） 段取り作成

いきなり全国一斉にフルコンピュータ化など出来る訳がない。地方部などは電話線すら引かれて居ない所がある。国情、地域事情、予算などを勘案して、それにマッチした技術などを選定し、中・長期計画を策定し、具体的な工程表を作らなければならない。このためには、こうした経験を持つ先進国の実務的支援が不可欠になる。

（２） システム化上の問題

ここで最も留意しなくてはならないポイントはソフト開発である。コンピュータ化される行政システムは、ステップを踏んで順次成長を遂げて行く形を取らざるを得ない。このため、システム機能を実現するためのソフトウエアシステムは、この成長に合わせ、矛盾やトラブルを生起する事無く機能拡張が図れるよう綿密な開発作業と、それに対する厳重な管理がなされる必要がある。
これらを一時たりとも疎かにすると、消えた年金のような取り返しのつかぬトラブルに見舞われる。
ソフトウエアについては、初期開発はほんの始まりでしか過ぎず、その後が本番と心得え、国としての自立体制を整えさせる必要がある。

４．　如何に支援するか

従来、電話網の設計、建設、保守で取って来た支援のやり方が、そっくり、もしくは若干の手直しで通用するとは考え難い。
これまでのケースはハードウエア主体のいわゆる箱物建設であって、その後の維持管理もターンキーベースで大方は済んで来たと言えよう。
コンピュータによるシステム化は、主役が成長を前提とするソフトウエアシステムであるから、造って置いて来て、後はターンキーでどうぞ、と言う訳には行かない。
とは言うものの、支援部隊が未来永劫そこに居座って国家行政に係わる事は、現実的に不可能である。
こうした仕事を一手に引きうける新たな国家的組織創りの支援を行う形をとるべきではなかろうか。

５．　国営（国策）ソフト開発会社の創設支援（結びに替え）

行政システムは各種の省庁に跨ったもので、そのシステムは、限りなく拡大・成長し、巨大化する宿命を持つものである。しかも、システムには、高度のセキュリティ―が要求される。
こうしたシステムの開発・維持・管理には、国家的組織の創設が有効である。しがらみも

少なく、国家権限を揮いやすいうちにこうした組織を創るべきである。
言うまでも無いが、この組織は一般企業のシステム部のようなソフトウエアの発注業務を行う所ではない。自らコンピュータネットワークを創り、そこに必要とされるソフトウエアを設計・開発・維持・管理するのである。
支援は、このような組織の立ち上げと、軌道に乗るまでのサポートである。

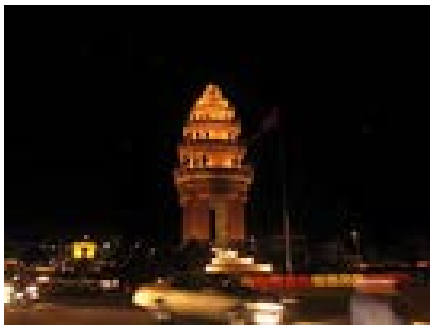
我々はこうした分野に目を向け、新たな支援活動を志すべきではなかろうか。このためには、支援する側も確りとした組織的体制を構築する必要があろう。

以上

現地たより　青年海外協力隊　カンボジア活動報告

カンボジア青年海外協力隊（JOCV）　理数科教師
本会会員　賀村瑠璃子

１．　カンボジア・配属先の学校について


プノンペンの独立記念塔

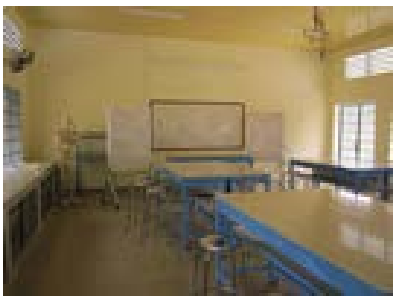
みなさん、はじめまして。2009 年 9 月 27 日から理数科教師としてカンボジアに派遣されている 21 年度 2 次隊 JOCV の賀村瑠璃子です。

私が配属されている職場は、カンダール州中学校教員養成校です。カンダール州は首都プノンペンをぐるりと囲むように隣接している州で、その州都がタクマウです。プノンペンの独立記念塔から南へ約 12km、車で 30 分程で到着します。プノンペンへの通勤圏内であることから、配属先にもプノンペン市内に住居を構えている教員も少なくありません。

タクマウ市のシンボル像

全校生徒数は 480 名（9 クラス×2 学年）。学生は、カンダール州、コンポンチュナン州、コンポンスプー州の 3 州の出身であり、卒業後はそれぞれの地元の中学校教員になります。教職員数は 64 名（生物 4 名、地学 3 名、物理 3 名、化学 3 名）。2008 年、2009 年に各 1 名ずつの理科教員が JICA 青年技術研修において日本での研修を経験しています。JOCV は 2007 年 3 月に理数科教師、2008 年 6 月に家政教師が配属されていました。現在、理数科教師は私で 2 代目です。

JICA 以外にベルギーの NGO 団体 VVOB が支援に入っており、敷地内に拠点を構えています。VVOB はベルギー人スタッフおよび現地クメール人スタッフで運営されており、毎週、定期的に理科の先生方を対象とした実験および教授法の研修を行っています。VVOB は本校において、理科(2008 年 7 月～)、コンピュータ(2009 年～)、農業(2010 年 1 月～)の 3 プロジェクトを実施しています。



左：カンダール州中学校教員養成校の正門　　中央：日本政府の草の根事業によって建設された理科棟　　右：理科棟内部（生物室）

２．　協力隊参加へのきっかけ

私が協力隊の存在を知ったのは、中高校生くらいの頃だったと思います。世界中の途上国で現地の人々と一緒に働く日本人がいるということをテレビが雑誌かで見たのが始まりだったような気がします。その頃から、私もいつかは参加してみたいなぁとぼんやりと思っていました。理由は、単純に外国で働くなんて面白そうだと思ったからです。

そんな時、大学時代に偶然、南米ホンジュラスの協力隊 OB に出会いました。初めて話した協力隊 OB。彼女に協力隊について具体的な話を聞き、まだ自分が行ったことのない国に行ってみたい、そこで何かをしてみたい、現地の人と話してみたいという気持ちがますます強くなりました。それまでは「なんとなく行きたい」と思っていた気持ちが、その時から「必ずいつかは協力隊に参加する」という強い気持ちに変わったと思います。また、彼女は自分のきっかけや体験を語りながら、こうも言いました。

地元・タクマウ市にて　僧侶の行列

「隊員になるのなら数年の社会経験を積んでから参加した方が良い。自分にとっても相手にとっても、その方が必ず役に立つ。」

その後も協力隊について調べたり考えたりした結果、就職して 3 年は日本社会で働こう、それでもまだ行きたかったら応募しようと密かに決心しました。

就職社会人になって 3 年が過ぎましたが、協力隊への思いは消えません。会社での仕事は面白かったし、恵まれた職場環境で生活も充実していました。このまま日本に留まって華やかな 20 代を終えるのも悪くないなと思う一方、このままズルズルと協力隊に応募しなかったら後々の人生において後悔するかもしれないという気持ちも消えません。色々考えましたが、「やるなら今しかない！」と社会人 4 年目の秋についに協力隊に応募しました。

成田空港にて　カンボジア同期の JOCV＆SV

３．　なぜ理数科教師？

結果はめでたく合格。派遣先はカンボジア。職種は理数科教師。NTT グループという通信企業で働いておきながら、PC 技術ではなく理数科教師という職種で参加するということに多くの人が違和感を覚えると思います。しかし、私は理科を教えることと、PC 技術を教えることの根本は同じことだと思っています。SE にとって、理論的に物を考え、実行する力は欠かせません。理論的に物を考えるという練習は、学生時代の理数科目に端を発します。理論的な考え方が身に付いていれば、いつかの将来 PC 関係の道に進む子も現れるでしょう。

同僚の家での食事

また、この職種を選んだ最大の理由として、私は子供たちに何かを教えたかったのです。PC 技術だと大人相手になると思ったので、応募の際に子供と対面できそうな教師を選択しました。しかし結果的に配属先であるここは教員養成校なので、子供というよりは 18 歳以上の大人なのですが…。

2009 年度大使館主催・JOCV 慰労会

４．周囲への報告と理解

私は社内で初の協力隊参加者です。当初、弊社には協力隊参加制度はありませんでした。しかし、自分が協力隊に行きたいこと、且つ 2 年後にはまた会社に戻ってきたいということを正直に話したところ、わざわざ就業規則を改変してくれたのです。感謝の気持ちと同時に、そこまでしてくれたことに驚きました。

元々、協力隊への派遣実績のある NTT グループだったことも周囲の理解を得る環境として幸運だったと思います。休職して協力隊に行きたいと上司に相談した時も、NTT グループの同期や知り合いで協力隊に行った人がいると聞きました。先輩方の礎のおかげで理解が得やすい環境になっていたことに感謝しています。もしも今後、弊社からまた希望者が出た際には、「賀村は協力隊に行って良くなった。だから後輩も行かせよう。」と言ってもらえるように成長して帰ると約束して出てきました。

５．現実

カンボジアに派遣されてから 8 ヶ月が過ぎました。目新しく、楽しいこともありますが、つらいこともあります。言葉がしゃべれなくて笑われたり、郵便局や市場で通常よりも高い値段を取られてケンカすることもしばしば。そんな小さなことにいちいち怒ったり傷ついたりすることもありますが、優しく親切にしてくれる人もたくさんいて救われています。

カンボジア人は人懐こく親切な人が大半で、道ですれ違う時もニコッと微笑んでくれます。

外国人が少しクメール語を喋ると喜んでくれます。多くの人々が親日家で、日本のことが大好きです。それは、日本がカンボジアに多大な援助をしているということも関係していると思います。街中では、日本の援助で作られた橋をたくさん見かけます。大きな橋から小さな橋まで、こんな田舎にまでと思うような地方にも、橋の欄干には日本とカンボジアの国旗が刻まれています。教育関係においてにも日本の援助で建てた校舎をよく見かけます。JICA の知名度も好感度も高いです。

2010 年 3 月　同任地の先輩隊員が帰国する際に

校長・教頭先生が開いてくれた食事会

生活自体は楽しんで過ごしていますが、職場での仕事はうまくいかないことの方が多いです。クメール語という言語に阻まれ、思うように伝えきれないもどかしさ。プライドが高く、コミュニケーションの取りづらい先生もいます。ベルギーの NGO から大きな支援も入っているし、彼らから私に対して特に何かをしてほしいと言うわけでもなく、この数ヶ月間、私という存在はいてもいなくても良いような印象を受けました。正直、とても寂しかったです。本当にこの人たちは自分たちからボランティアを要請したのだろうかと疑問を感じ、私はここに必要な人間なのだろうか？ JOCV の役割とは？日本の ODA とは？一体なんなんだろうと悩む日々が続きました。

しかし、会社を休職させてもらい、日本の税金で来ている以上、何もしないわけにもいきません。最近、ようやく自分の活動として生徒に対して簡単な理科実験を教え始めました。将来の中学校教師になる生徒たちです。彼らは卒業したら地元へ帰って教職に就きます。中には、電気も通ってないような学校に配属される子もいます。そのため、田舎でも手に入るような物であまりお金のかからない実習・実験を意識しています。

そして、もう一つ意識していることは、簡単な物でも一人一人が手を動かして、実際に作ってみるということです。見ているだけだと簡単そうに見えますが、実際にやってみると何でも意外と難しいものです。代表だけ、教師の演示実験だけではなく、一人一人で工作し、実験し、観察し、レポートを書くという機会を作りたいと思っています。

とにかくクメール語との戦いです。手順や解説プリントをクメール語で準備しますが、とにかく翻訳に時間がかかります。最初は手書きでしたが、修正や保存を考えるとやはり PC でのうちこみが必須です。最近、やっと PC でクメール語を打つことに慣れてきました。

６．これから

理科実験教室の生徒たち　理科教員養成コースとしては「生物・地学クラス」と「物理・化学クラス」がある

協力隊に行きたいけど、会社には戻ってきたい。非常に我が侭な考えでしたが、会社はそれを受け入れてくれました。周囲の多くが会社を辞めて隊員として参加しています。私が現職参加だと聞くと、その待遇に誰もが驚きます。2年後、どうやってこの経験を社会へ還元していくかも、この2年間の宿題だと思っています。

帰る場所があるということは、安心して活動に取り組むことができるということでもあると思います。隊員によっては、帰国が迫ってくると活動よりも日本での就職活動に時間を費やしてしまったり、不安で不安で任期を短縮して帰国してしまったりすることもあるそうです。その点、私は最後までじっくりと取り組むことができます。一般企業からの協力隊参加について、JICA の現職参加制度をもっと活用してほしいと思います。

また、親日家を増やすこともJOCVの役割だと言われています。現地の人と一緒になって仕事をする、現地の組織に入る、そんな経験はおそらくもう無いでしょう。今後もしも一緒に働くことがあったとしても、それは日本企業人の一人という立場になると思います。私が本当にカンボジア人と同じ立場に立った行動をすることができるのは、今だけかもしれません。私の活動はやっと始まったという感じですが、残りの1年3ヶ月で生徒のためにどれだけやれるか挑戦していきたいと思っています。

青年海外協力隊派遣壮行会開催

去る６月１１日午後７時から、渋谷区広尾のＪＩＣＡ地球ひろばレストランで、ＮＴＴ東日本松永健司さん（ＪＯＣＶジンバブエＯＢ）等ＪＯＣＶＯＢ主催で６月に派遣される予定の細野哲志さん等２２年１次隊の壮行会が賑やかに開催されました。本会からも数人が参加いたしました。

細野さんはＮＴＴデータから、ブータンへコンピュータ技術指導で派遣されます。また大倉健介さん（ウズベキスタン、コンピュータ技術）三谷知廣さん（キリバス、コンピュータ技術）は退職し派遣されるとのことです。

３０名を超えるＪＩＣＶＯＢ，ＳＶ経験者など、集い若いエネルギーを遺憾なく発揮できるよう励ましました。ＪＯＣＶＯＢを代表して渡辺栄一さん（元ＮＴＴ東日本ケニア、当会会員）が出席者を代表して、『元気で頑張って』とエールを送りました。

出席者は、タイ、インドカレーのアジア料理に舌鼓をうちながら、遅くまで梅雨の空の下で和やかに語らいました。

本会入会者リレー寄稿 第５回　パラガイ派遣記

H20.8.21

下井田　秀雄

シニアボランティア体験談

１．応募の動機

JICA のシニアボランティア制度の概要は以前から知っており、退職後に良い案件があればいつか応募したいと考えていました。53 歳で NTT を退職してドコモの関連会社に再就職し、海外事業部で国際関係の仕事をやっていたのですが、ドコモの海外投資の縮小に伴って事業部が廃止されました。このため、他の事業部に配置替えとなり慣れない仕事に疲れ始めたころ、シニアボランティアの募集でパラグアイ電気通信学園の「デジタル無線」の案件が目に留まりました。60 歳までまだ 2 年近くありましたが、日頃から退職後は自分らしい生き方をしたいと思っていたので応募を決心しました。

２．選考試験の状況

海外での専門家やコンサルタント活動の経験があったので応募用紙の記入で困ることはありませんでした。簡易健康診断も特段の問題はなく 1 次試験に合格しました。2 次試験では面接と語学試験、精密健康診断がありました。面接は過去の経験をベラベラと喋って難なく通過しましたがスペイン語の試験では苦労しました。筆記試験は問題数が多く制限時間一杯でやっと全問回答しました。口述試験では外人試験官からスペイン語の新聞を読まされ、内容に関する質疑応答がありました。久し振りのスペイン語だったので思ったことの半分位しか喋れませんでしたが、応募者が少なかったのか幸いにも 2 次試験に合格しました。

３．活動内容

（１）派遣先　国立アスンシオン大学　工学部　技術イノベーションセンタ

（２）派遣期間　　H16.4.5～H18.4.4（2 年間）

（３）指導科目　　デジタル無線

（４）要請内容　　カウンターパートに対する訓練
デジタル無線設備の操作と維持管理
デジタル無線設備の実習指導

（５）主要な活動内容

・グループ派遣

デジタル伝送、デジタル無線、テレビ番組制作、グループコーディネータの４名
着任 1 年後に通信網計画（実際の指導内容は IP 関連技術）1 名が着任

・主要な無線設備

NEC 製　140Mb/s　6GHz 帯　デジタル無線装置　1 対向
NEC 製　1500MHz　DRMASS　基地局 1・中継局 1・端末局 4

・測定器の修理

100kHz～2.08GHz　信号発生器　1 台、9kHz～8.5GHz　スペアナ　2 台

マイクロ波システムアナライザ　1台

・デジタル無線装置のパネル修理とチューニング

電源パネルの故障修理と送受信機においてBER特性改善策の実施

・その他、スペイン語訓練教材の整備、CONATEL（電波管理局）への携帯基地局電波が与える人体への影響調査に関する技術協力、IMT-2000新技術の講演

（6）JICAパラグアイ事務所の概要

・JICA職員数：　約30名

・シニアボランティア：　約40名

・日系社会シニアボランティア：　約10名

・青年海外協力隊：　約90名

・専門家：　約10名

（7）派遣先について

旧ANTELCO（電信電話公社）は民営化に伴いCOPACO（電話会社）になったが、その際電気通信学園（IPT）はアスンシオン大学に移管された。その後、名称もIPTからCITEC（Centro de Inovación Tecnológica）になり現在に至っている。教官も大学移管時にCOPACOに移ったり退職した者が多く、現在は5～6名しか残っていない。

（8）パラグアイの一般情勢について

貧富の差が拡大。比較的安全だが宿舎で泥棒に入られたり、携帯電話を引ったくられた青年協力隊員もいる。交通事故は多く実際に事故に遭遇した専門家やJICA職員もいる。しかし、全体的に見れば非常に内気で大人しい性格の人たちである。日本人間ではゴルフ、テニス、ソフトボールが盛ん。専門家・シニアボランティアで組織する「親和会」のHPあり。

http://www.geocities.jp/shinwakaipy/jicaexpert.html でアクセス可能であるが、HP担当者が帰国したためか1年以上更新されていない模様。

パラグアイには移住した日系人が7千人おり各分野で活躍している。ソフトボールで日系3世の青年にお世話になったが、日本人以上に礼儀正しく真面目であった。

4．シニアボランティアを終えての感想

シニアボランティアの仕事は昔の専門家のそれとほぼ同じであったので苦労はありませんでした。しかも個人の立場で従事するため出身会社との「しがらみ」もなく気は楽でした。私の場合は妻も帯同したので、パラグアイ国内や近隣諸国への旅行やゴルフを一緒にプレーするなどプライベートな楽しみもありました。

最近では派遣手当ての減額、一時帰国制度、健康管理旅行等の諸待遇が悪化したと聞いています。本来のボランティア精神の考え方から見ると当たり前でしょうが、これではちょっと躊躇してしまいます。

しかしながら、微力ながら途上国での国際協力に貢献したという達成感はあります。今後NTT退職者の中から多くの方々がシニアボランティアへ挑戦することを祈念します。

５．写真

CITEC 正門

CITEC 中庭

無線機械室

高層アパート群

ラパチョが咲き乱れる住宅

嵐がやって来る

海外派遣者への支援体制について

ＮＴＴＯＢＳＶ会の活動の一環として、本会の派遣中ＳＶの支援を行っておりますが、その活動の一層の強化策として、次ページ以降に掲げる「ＪＯＣＶ／ＳＶサポート体制について」に基づき、派遣中のＳＶのみならずＪＯＣＶにも支援を拡充しようするものです。これはＳＶ及びＪＯＣＶの応募者増にも寄与できるものと考えます。

これは本会会員で、ＪＯＣＶＯＢの山下満男さんからいただきました提案を紹介します。そして支援内容や体制を段階的に充実させて行きたいと考えております。

なお、現在海外で活躍中の方々への支援の一環として、当会顧問の石井孝氏による週間“Japan IT Digest”をホームページの「ＮＴＴＯＢＳＶ情報交換ボード」で配信しております。

また、本件に関しご意見、ご希望、提言などありましたら、事務局まで連絡をおねがいします。

JOCV/SV　サポート体制について

サポートのポリシー

１．目的

１）海外で活動中のJOCV/SVがスムースに活動出来るように技術的・管理的な側面からサポートし、活動内容の高度化/効率化を図る。

２）派遣国が抱える電子政府、教育、医療、環境、防災分野等におけるＩＣＴを活用した問題解決にJOCV/SVの活動を通じて取り組んでいく。

３） JOCV/SVだけでは解決出来ない課題については、関係部署協力のもと、問題解決に取り組む

２．サポート対象

１）ICT分野で活動しているJOCV/SV隊員

２）電子政府、教育、医療、環境、防災分野等で、ICTを活用した問題解決に取り組んでいるJOCV/SV隊員

サポート体制

派遣者

①サポート要請

サポート窓口

事務局

ノウハウDB

②事務局はサポート内容を把握後、サポート部隊を編成

サポート部隊A

サポート部隊B

サポート部隊C

③ サポート部隊（2、3名で編成）は派遣者をサポート
サポート部隊はサポート概要を事務局に報告
事務局はサポート概要をDBに保管・管理

アクションプラン

アクション	担当	1Q	2Q	3Q	4Q	記事
1. サポート体制確立の国内関係部署への根回し（周知）	加藤	△				
2. サポート体制確立のJOCV/SVへの周知。サポート要請の把握	加藤 村上 山崎		△			ブログ 会報
3. サポート体制の確立	加藤 山下		△			スモールスタートが望ましい
4. サポート実施	加藤 山下 サポート部隊			△	⇒	
5. サポート体制の検証・見直し	加藤 村上 山崎 山下				△	実績を分析検討

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。
それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申しあげます。

送付先は、編集部　加藤隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp) ,または
村上勝臣(murakami.katsumi@mb.mni.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

- 編集担当しております村上です。
- アフリカで開催されたサッカーワールドカップ２０１０は日本に関してはベスト１６進出という記録で終わりました。今回リレー寄稿で下井田さんからパラガイ派遣記を頂きました。奇しくも決勝トーナメントの相手の国でしたがなんかの縁かなと感じております。
- 巻頭言として、当会顧問、石井さんから、今後の途上国（中進国）に対する国際協力のあり方について提言を頂きました。具体的なプロジェクトの形成に関しては今後時期をはかり関係部門へ働きかけていきたいものと望んでいるところです。
- 現地活動報告で今回はカンボジアで活躍中のフレッシュＪＯＣＶ隊員の賀村さんから寄稿頂きました。私は２００６年から２年間トンが勤務し、現地ＪＩＣＡはＪＯＣＶ，ＳＶで合計４０名くらいの小所帯だったので全ての歓送迎会ミーティング等合同だったのでＪＯＣＶ隊員との交流を十分しました。賀村さんの報告の感想１．ＪＯＣＶの皆さんは当初歓迎ではなく疎まれて苦労する、そして苦労の挙句何とか理解を得る。そして惜別。賀村さんのリポートを含めて私は、福島県勤務サラリーマン「会津の３泣き」に似たりと思うのです。『１．赴任当時は仲間に入れず泣く、２．受け入れて貰って嬉しくて泣く、３．別れに名残惜しくて泣く』。感想２．賀村さんはじめＮＴＴは、現役でＪＯＣＶ派遣しているおそらく日本のトップクラスの企業だと思います。厳しい経営環境にありながら、大局的日本のあり方を考慮しての判断と１市民として賀村さんの職場を含め高く評価しています。今後はＪＯＣＶの方々の寄稿も引き続きお願いしたいと思います。
- 『海外派遣者支援体』の記述について読みにくい面お詫び申し上げます。できることから始めようということで提案しました。関係各位の意見を頂戴しながら、立ち上げて行こうと考えておりますので、ご指導をお願いします。本件に関してはJOCVOB 山下満男さんの全面的な協力をしてもらっております。（以上）

- 事務局長で、編集を取り纏めしております加藤です。
- 本会に新たな流れが始まっております。その一つが海外で活躍できる人材育成への寄与です。これはわが国 ICT 国際競争力強化につながる第一歩かと考えております。石井孝顧問の提案

はその観点からも示唆に富むものです。

・ もう一つの方向が NTT 関連青年海外協力隊（JOCV）との協調です。前回の会報で JOCV の派遣状況について報告させていただきましたが、今回では、本会会員の賀村さんのよる JOCV としての活動を紹介していただきました。また山下満男さん提案の派遣ボランティアへの支援は SV はもとより JOCV にも適用されるもので、近く実施を開始し、その後徐々に充実を計りたいと思っております。私の経験からも、殆どが単独で行う活動において、わが国からの支援は本当に心強いものでした。それでこのプロジェクトは現地での活動に役立つことはもとより、ひいてはより多くの方々のボランティアの応募・派遣に寄与するものと考えております。（以上）

総編集長：NTTOBSV　事務局長　加藤隆
編集長：NTTOBSV　村上勝臣
発行：NTTOBSV 会（kato2415@jasmine.ocn.ne.jp）